日本語電子書誌システム（dbDB：S）の構築

——保田與重郎関連文献のデータベース化試案——

谷口敏夫

はじめに

1　新たな書誌データベース構築の意義

1．1　これまでの書誌データベース

1．2　電子図書館と私的な利用（PML）

2　dbDB:S の特徴

2．1　書誌類似情報

2．2　目次情報とその階層構造

2．3　初出と再録関係

2．4　内容分析情報

2．5　インターネット利用

3　関連資料解題とその書誌構造

3．1　イロニア（新學社）

3．2　保田與重郎と昭和の御代（福田和也）

3．3　和泉式部幻想（川村二郎）

3．4　影たちの棲む国（佐伯裕子）

3．5　浪曼的滑走（桶谷秀昭）

4　インターネット上での公開

4．1　全体概念と各機能

4．2　WWWとデータベース

4．3　利用者の利用

4．4　将来の姿

まとめと展望

註と参考文献

付　録

(1) 保田與重郎関連資料

(2) dbDB:S で使った機器システム

(3) データベース格納形式

(4) データベース化とサーバー開設に関する技術メモ

(5) 関係 URL リスト

はじめに

近年，インターネットや電子図書館の普及とともに文献を電子的に扱う問題に直面するようになってきた。多くの図書館で，一般公開用の図書電子目録（OPAC）などが整い，情報に接することは容易になってきた。しかし実際のシステムは，汎用性と一般性と網羅性を充実するために，自らが研究する主題の関連文献を精密に扱うには，不十分な感がぬぐえない。そのような実情に基づいて，先頃ディジタル書誌データベースのための目録規則を考え，これをdbDB（Ver 0.5）(1)と名付けて発表した。しかしそれは規則の原案であり，その規則に従って現実の文献類をコンピュータ上で操作するまでには至らなかった。

本稿は，いくつかの典型的な文献を例として，インターネット上で実際に文献情報を格納検索するシステムを構築し，将来の本格的なデータベース作成の第一歩とするものである。

データベースの内容は，昭和十年代に生まれた文学運動「日本浪曼派」の中心人物であった保田與重郎関係のものである。しかし本稿では，この文学運動や，保田の文学思想史的な評価には言及せず，主に「現代文学評論における，書誌データベースに関わる諸問題の解決」に主眼をおいた。

なお，本稿で使用するdbDBという名称については，先に定義した目録規則dbDBを本稿で新たにdbDB : CRとし，その規則によって得られたデータを運用管理する諸システムをdbDB : Sとした。また実際の電子書誌データベースは「保田與重郎dbDB」とした。この三者の関係は，dbDB : CRという目録規則によって得られた文献の書誌情報を，インターネット上のシステムdbDB : Sで運用管理し，その際のデータベース主題が「保田與重郎関連文献（保田與重郎dbDB)」であると考えていただきたい。

1　新たな書誌データベース構築の意義

現代の国立国会図書館，大学図書館や大規模公立図書館などの例に見られるように，従来図書カードで作成されてきた目録が，コンピュータを利用した

OPAC（Online Public Acsess Catalog）として人々の目に触れるようになってきた。こうした目録類の内容は，より広義には書誌の一種である。またこうした書誌の巨大な集合は，書誌データベースと呼ばれ，学術情報センターや国立国会図書館の例に見られるように，全国規模，世界規模で情報が蓄積され，利用されている。

これらの書誌情報を制御する規則は目録規則と呼ばれ，西欧の図書雑誌等については，AACR（英米目録規則：Anglo-American Cataloguing Rules），国内のものについてはNCR（Nippon Cataloging Rules）のような一般的ルールが歴史的に確立され，利用されている。そういった中で本稿の内容は，別に定めた目録規則 dbDB：CR により，特定主題の関連文献情報を記述し，それをコンピュータに整理し格納する実際の過程を考究したものである。

なぜそれを行うに至ったかについては，dbDB の成立事情としてすでに記した。(1) 要約すれば，現実的な研究では対象資料そのものに関する，より精緻な情報が必要であるし，またそういった情報を将来にも利用できるようなフレーム（枠組み）が求められつつある事情によるものである。

1．1　これまでの書誌データベース

一般的な目録情報は，たとえば現代刊本を例にとるならば，ある図書と別の図書とを相互に唯一独立したものとして弁別できる最小限の特徴を，表層的な情報によって記述したものである。また現実的な目録は，一定のルールにしたがった「手がかり語」を用意し，これを標目（アクセス・ポイント）として基本書誌情報に付加し，さらに所蔵箇所なども付けた上で「所蔵目録」としている。

だがテーマを限定すると，これらの網羅的，てがかり的な情報だけでは，実際の研究に役にたたない事例が多々ある。総じて，世界的に目録所蔵情報が大規模になるに従って，著作者がつくる特定テーマの膨大な参考文献リストなども，従来に比べて意味が減じてきた。一般的な例では，研究当初に必要とされる文献リストなどは，優れたOPAC を用いて，特定の関連著者や，比較的特

徴的な言葉を使えば，その多くが検索される状態にある。

すなわちある文献がどこにあるのか，どんな関連文献があるのか，という程度の情報レベルでは，今後の専門的な研究においては，「知」の再生産に貢献することも薄れてきたと言って過言ではない。

本稿ではまず，これまで網羅性[(2)]の維持と現実運用という，荷重負担のもとに切り捨てられてきた情報，すなわち目次情報や帯情報，著者紹介やカバー写真など多くの取りこぼされた情報に目を向けた。さらに，文献と文献との関係情報，あるいは読者や研究者が独自に持つ評価情報も対象とした。その上で，こうした情報を将来にわたって全体的に蓄積利用できるような，書誌データベース構築の具体例（dbDB：S）を詳述した。

1．2　電子図書館と私的な利用（PML）

こういった特定分野を想定した緻密な文献整理は，これまでも歴史の中で多様に行われてきた。書誌学の範疇でいうと，個人書誌あるいは主題書誌といわれるもので，人文科学や社会科学の世界で重く見られてきた。分野がある程度限定されるので，作るのも使いきる者も，少数個人的な傾向があると言っても良い。これは，大規模図書館などが多数のカタロガーによって作成する全国書誌や，一般的な図書目録とは，異なったものである。

しかし先頃から，電子図書館構想というものが図書館の世界，総じて文献資料を対象とするあらゆる研究者や，一般利用者の目に触れるようになってきた。この電子図書館という構想は，スケーラビリティーがあるといわれるように，大規模図書館から小図書館，資料室，ないしは個人図書館にまで敷衍できる考え方が含まれている。すなわち，パーソナル・メディア・ライブラリー（PML）[(3)]などを容易に構築できる技術背景が整い，本稿での dbDB：S のような個人的システムでもうまく機能することが十分可能になった。

さて，元来「書誌」というものはデータベース管理システムに親和性が高い。たとえば，『定本三島由紀夫書誌』（島崎博，三島瑤子共編）[(4)]には三百近くの書影と，六十葉以上の舞台映画関係写真が掲載されている。これらはマルチメディ

ア・データベースの原型と呼んで良いであろう。また，『保田與重郎書誌』（神谷忠孝，奥出健共編）[5]には，初出作品目録，再掲作品目録，著作解題があり，前二者の「初出と再掲」関係は，インターネットや電子図書館技術で用いられているハイパーテキストの「リンク」によって，より整合性の高い書誌に成長する可能性を持っている。あるいは，『保田與重郎全集解題』（谷崎昭男著）[6]における解題は，事実の正確な記述とともに，著者自身の作品に対する評価が明晰に含まれている。これは研究者の「著者性」を持った一個の作品である。すなわち，二次資料であると同時に一次資料であるとも言えるものであり，全文テキストデータベース構築の，良き手本となる。

無論，従来の書誌学においての書誌の捉え方が，これら例に挙げた書誌に全てが合致するわけではないが，おなじ「書誌」とは言ってもその多様性，幅は広い。その個々の是非を問う前に，現実として，各研究者が真に役に立つものをつくる，という共通認識の上で，その開花したものは，一つの形式にはとどまらない。

こういった研究者の方法論，あるいは「人間」というものが持つ多様性を含めて，再現性や将来性を踏まえた上で，今後とも書誌・全文をより有効に記録していくには，現代では技術的にディジタル・テキスト化がもっとも幅広い受け入れ能力をもっている。

よって，特定のテーマ，小さな専門分野であっても，あるいは利用者が限定されてくる故にこそ，小さな個人電子図書館（PML）に新しい書誌を作ることの意義もある。dbDB：CR（目録規則）や本稿での中心となるdbDB：S（システム）は，こういうた電子図書館化の布石である。

2　dbDB：S の特徴

このような，書誌情報を管理運用するための dbDB：S によって成立するデータベースの基本構成は図１のようになっている。

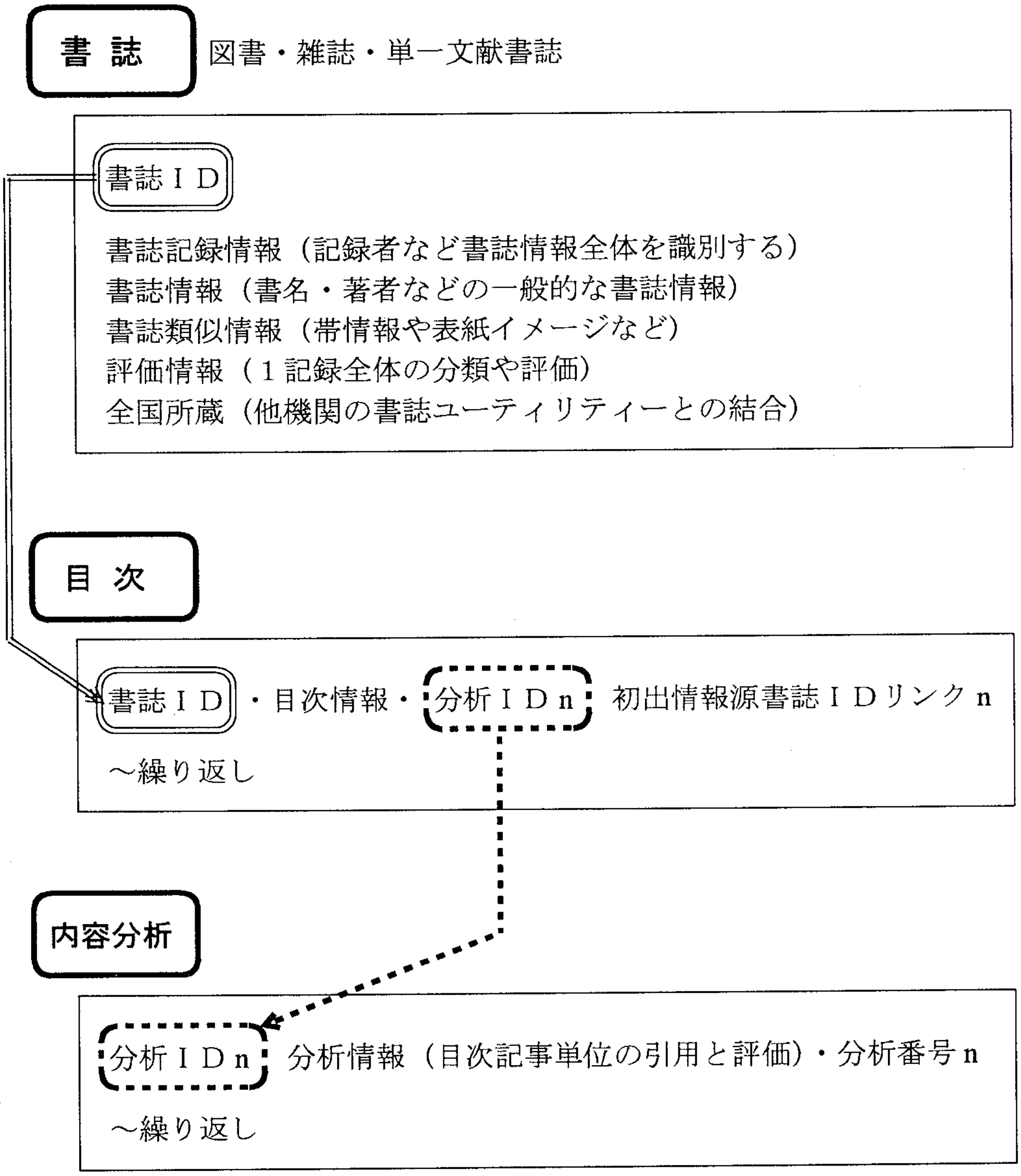

図１　dbDB：S の基本構成

一つの文献を，書誌，目次，内容分析の三つの観点から分離格納し，これらを関係データベース機能によって有機的に結合させている。このことによって複雑なデータ関係を正確に定義付けることが可能となった。こうした構成による dbDB：S の特徴は次の五点である。

(1)　書誌類似情報として，帯情報や，表紙イメージなどの付帯情報を持つ。

(2)　目次情報を，階層構造を維持したまま，格納する。

(3)　初出と再録（再掲）関係を，リンク構造によって決定付ける。

(4) 研究のための内容分析情報を，精緻なレベルで持つことができる。

(5) インターネット利用を前提にし，全国書誌と結合することができる。

この五点について2.1以下の各項で詳述する。

2．1 書誌類似情報

書誌類似情報とは，dbDB：CR では具体的に次の七つを規定している。(1)

2.1.1 文字数

文字数，行数，頁数によって平均的な全文字数を推量し，四百字原稿枚数に換算する。またその文字数に2を乗じて，コンピュータ上でのバイト数をキロ単位で記す。雑誌などの場合は典型的な版面によって計算する。

2.1.2 装丁

装丁者名とその役割を記す。

2.1.3 表紙イメージ

帯イメージは「帯情報」で処理する。

カバー及び本体の表裏合計四枚を格納する。必ず背文字をいれる。

2.1.4 写真

装丁者に関連する写真家，および内容写真の関連者を列記する。

2.1.5 著者紹介

著者紹介があれば対象資料毎に記録する。どのような紹介であるかは，対象資料毎に異なるので，その対象資料固有の属性として扱う。

2.1.6 帯情報

帯情報が文章として成立しているときは，テキスト情報として記録する。また，あわせてイメージ情報としても採取する。感覚的な単語の羅列に終わっているときは，イメージ情報だけでもよい。

2.1.7 その他

書誌記録情報，書誌情報，書誌類似情報における「その他」メモ情報である。しかしこの項目はデータベースの成長とともに特定項目として分離していく余地を残しておく。

これらの情報は，現行の図書目録などでは「注記」に含まれ，必須の情報として扱われてはいない。これを書誌類似情報としてまとめた意義は別論文(1)に述べた。たとえば帯情報(7)を例にするなら，一般的に出版社の宣伝，広告とみなさ

れて軽く扱われる例が多い。たしかに古書店などで，帯があるかないかで経済価値が変化する例などをみても，あるいは身贔屓にすぎる文言を見ても，精密な情報としては違和感をもつ場合もある。しかし全てがそうではないし，あるがままに，著者や，著者の依存した出版社の現実的な当該図書への対処という観点からみると，貴重な情報も多い。なによりも，著者がいわんとするところを，編集者なりコピーライターなりが帯内容として選んだ語句は貴重である。その図書全体の「とらえられ方」を示していることが多々ある。よって，類似情報という別立てではあるが，そのためにフレームを設けた。宣伝広告に惑わされるというよりは，それもまた図書に対する接し方の一つであると考えた。

2．2　目次情報とその階層構造

目次情報の取り扱いについては，長尾，谷口，黒橋[8]などが研究を行っており，電子図書館 Ariadne[9] でも使われている。これは，目次を平面的なテキストとだけ見るのではなく，学術図書に顕著なように，概念の階層関係を明瞭に現した知識樹の原木とみなす考え方である。そのことによって，単純な語彙の検索では捕らえきれない言葉の文脈内での位置づけを，検索に生かすことができるようになった。

dbDB : CR では，近い将来の全文処理を考慮に入れながら，目次の階層関係を記述するために，HTML タグ[10]のうち，H1～H6 までの階層構造用タグを，目次内に埋め込む仕様を持っている。例示1に従えば，4.3がそれに該当する。

例示　1

4.0　書誌 ID　　：M／和泉式部幻想／川村二郎／( ) 1996
4.1　格納表　　：目次
4.2　階層　　　：(HTML タグの利用)
4.3　タイトル著者：〈H2〉ロッテは何故猥褻か〈／H2〉, 1, 9-25, ゲーテの描いた女性像は, …,
～省略～

2．3　初出と再録関係

ある論文ないし記事の「初出と再録（再掲）」という関係は，分野によっては貴重な情報を持つ場合が多く，dbDB：CR ではこの関係情報定義のための要素項目群を用意した。初出の媒体の諸要素を知ることにより，この関係自体が「知識」となる例もある。たとえば，初出と再録との異同内容によって，著者の考え方を追尾することに，有効な場合がある。例示２での4.4，4.5が該当する。

例示２

4.0　書誌 ID　　：M／和泉式部幻想／川村二郎／( ) 1996
　　～中略～
4.3　タイトル著者：〈H2〉ロッテは何故猥褻か〈／H2〉，1，9-25，ゲーテの描いた女性像は，…，
4.4　初出情報　　：イロニア，(2)，93.10
4.5　初出情報源書誌 ID リンク：S／イロニア／新学社／（2）1993
　　～省略～

2．4　内容分析情報

資料に対する評価をここでは内容分析情報としている。評価の観点は大きく二つを設定しており，一つは図書のようにまとまった概念全体に対する評価である。この場合には，内容全体の評価を格納する項目，独自分類やキーワードを格納する項目などを，評価情報（書誌事項）として定義している。例示３とした。

例示３

3.1　評価者　　　：谷口敏夫
3.2　評価日　　　：970607
3.3　評価更新日　：
3.4　評価内容　　：優：ゲーテというよりは和泉式部私抄／保田，論也。
3.5　一般主題　　：日本文学／評論
3.6　キーワード　：エルテルは何故死んだか・和泉式部私抄・日本語録

もう一つは，研究者などがノートをつくる要領で，本文内容の抜き書きを記録管理するために，いくつかの要素項目を用意している。これは詳細な分析のための格納フレームであり，各項目は書誌関連とは独立させ「分析表」としている。具体的には，研究者ないし一般読者が本文を読み調査しながら，該当頁や分析観点，抜き書き，その他情報を格納できるようになっている。例示4とした。

例示4

5.0　書誌ID　　：M／和泉式部幻想／川村二郎／( ) 1996
5.1　分析ID　　：M／和泉式部幻想／川村二郎／( ) 1996／A01
　　分析番号：M／和泉式部幻想／川村二郎／( ) 1996／A01／01
5.2　格納表　　：分析
5.3　分析者　　：谷口敏夫
5.4　分析日　　：970808
5.5　分析更新日：
5.6　分析観点　：保田與重郎
5.7　分析頁　　：12
5.8　分析引用文：エンゲルスの残忍冷酷を言い立てながら，……
5.9　分析評価　：保田には信仰がない。そのような反語的態度か。……

2．5　インターネット利用

dbDB : S を構築することにより，保田與重郎 dbDB をインターネット上で公開し，個人電子図書館（PML）の一歩とすることの詳細は，後述の第4章でまとめた。ここでは，dbDB : S がインターネット上の諸技術と整合性を保つことによって，付加的な便宜性が生まれたことを述べる。それはこの dbDB : S に外部の特定の URL[(11)] を持たせることによって，全国での文献所蔵情報などが容易に得られるようになったことである。インターネットを利用しない従来の方式であると，このような方法をとることがはなはだ困難であり，融通性には欠ける。

このシステムは，今のところ谷口個人が所蔵する資料を中心に構築しているが，学術情報センターの WebCAT[(12)] を利用することにより，国内所蔵状況も把

握できるようにした。これは技術的に複雑なものではなく，WebCAT で得られたURL 情報をデータベースの中に格納し，リンク先を示したものである。利用者が該当部分を指示すれば，自動的にブラウザがその住所にアクセスするという工夫である。このような方法は，すでに学術情報センター自身も，試験的に雑誌目次情報と全文とをリンクした実験(13)で行っている。

3　関連資料解題とその書誌構造

この章では保田與重郎や日本浪曼派に関わる文献の簡単な解説と，その書誌構造を，いくつかの典型例から抽出した。時代は全て平成のものとした。なお，この章で扱った関連資料は付録(1)にとりまとめた。

まず，ここでは取り上げなかった雑誌「日本浪曼派」については，対象主題の原典として，1997年春から全目次及び記事の冒頭文をすでに入力し，インターネット上で公開(14)している。しかし，これはむしろ，保田與重郎全集との関連から別途述べる必要もあり，本稿では省略した。

「イロニア」は保田與重郎死後の，一つの文学史顕彰運動の現れである。一般に，これまで日本浪曼派は日本文学通史(15)では重く扱われてこなかった経緯もあるが，「日本浪曼派」と「イロニア」というこの二つによって，六十年前後の間隔を挟んだひとつの文学運動の始まりと，それへの再評価が窺われるものである。これは雑誌として扱った。

『保田與重郎と昭和の御代』（福田和也）は，福田が保田與重郎全集によって影響を受けた世代であり，平成時代の一つの感覚，新しい「現代保田與重郎論」として選んだ。

『和泉式部幻想』（川村二郎）は，雑誌「イロニア」との照応関係が明瞭な点と，保田與重郎論で実績のあるドイツ文学者，ないし「物語」に対する深い造詣を持った文芸評論家の作品として選んだ。

『影たちの棲む国』（佐伯裕子）は，女性歌人として，その実生活からの体験，およびその感性でとらえた保田與重郎，という観点から選んだ。さらに同付録には，次項の桶谷秀昭との興味深い対談もあり，単一文献という書誌構造の典

型と，内容の両面にわたる，貴重な現代保田與重郎論とした。

『浪曼的滑走』（桶谷秀昭）は，桶谷が文芸評論家としての側面に加えて，『昭和精神史』の著作者でもあり，昭和思想史研究者の作品として選んだ。『浪曼的滑走』は前半で保田與重郎と北村透谷との対比を行っており，新鮮であるし，「保田與重郎論」としての重厚さと充実度も備えている。

その他に1995年のものとして「文学のプログラム」（山城むつみ）があるが，書誌構造的な観点から省略した。

3．1　イロニア（新學社）

京都市山科区に本社のある新学社が平成五年七月創刊号から平成八年四月十二号まで，期限を切って刊行した季刊「雑誌」である。しかし雑誌とは言っても終刊の予定(16)があったことや，各冊のISBN，特集内容の充実などから見て，これはいわゆる「ムック」と考えてよいであろう。なお，先述した関係図書のうち，福田をのぞき，川村，佐伯，桶谷の各図書は，「イロニア」初出の論を中心に再掲している。そういう意味では，この雑誌は前掲各図書の母胎になったともいえよう。

特集内容(17)は以下のように，全てにわたって保田與重郎の業績に密着したものである。

1	わが万葉集	7	伊東静雄
2	独逸浪漫派	8	折口信夫
3	河合寛次郎と棟方志功	9	京あない，奈良てびき
4	佐藤春夫	10	三島由紀夫
5	明治の精神	11	現代畸人伝(18)
6	和泉式部	12	芭蕉

3．2　保田與重郎と昭和の御代（福田和也）

文藝春秋1996年 6 月10日初版第一刷のものである。19.5cm×14cm で 221p。参考文献は pp.218-220 にあり，全48点ある。初出情報は巻末に「初出「文學界」平成七年一月，三月，五月号」とだけあり，図書との対応はない。図書の

目次と雑誌初出とを照応させた結果を以下に記す。

図書目次
第一章　平成の精神　7-69
第二章　橋の佛　70-102
第三章　天上の修羅　103-137
第四章　皇神の道義　138-166
第五章　百合と山梔　167-192
第六章　昭和の御代　193-203
第七章　二十一世紀の歌　204-212
ひとまずの休止　213-216
参考文献　218-220
証言・資料提供　221

雑誌目次
文學界　49（1）1995.1
　解体と超越についての試論
　　第一章　平成の精神　140-175
文學界　49（3）1995.3
　解体と超越についての試論
　　第二章　橋の佛　218-236
　　第三章　天上の修羅　236-255
文學界　49（4）1995.5
　解体と超越についての試論(19)
　　第四章　皇神の道義　246-259
　　第五章　百合と山梔　259-272
　　第六章　昭和の御代　272-277

福田は図書「ひとまずの休止」で若干の「加筆」「まとめ」を認めている。図書章立ての上では，第七章「二十一世紀の歌」が雑誌掲載時には無かったものである。他に目立ったところでは，雑誌の最終掲載「第六章　昭和の御代」末尾では，「増鏡」による後鳥羽院御製「奥山のおどろが下もふみわけて道ある世ぞと人に知らせん」〈完〉と記してあるが，図書にはない。また，雑誌での副題「解体と超越についての試論」は，図書では見あたらなかった。

図書全体の論調は，明瞭であり保田與重郎「伝記」の色彩がある。第五章「百合と山梔」は，百合を三島由紀夫に，山梔を夭折した保田第四子に重ね，保田與重郎の三島の死に対する考えの一端をまとめている。

各章書誌構造の関係については，章立て形式などからみて，ほぼ初出の形を保っているが，図書における第七章の追加などは，初出から見て読後感が多少異なり，内容に影響を与えていると考えられる。

3．3　和泉式部幻想（川村二郎）

河出書房新社1996年10月25日初版のものである。19cm×14cm で 235p，他

に比してやや丈が低い。初出一覧が奥付の前の頁にある。十四項目あるうちの七項目が雑誌「イロニア」から再掲載されていて，この部分が保田與重郎に直接関わりを持つ。この分は図書目次では下記のように「Ｉ」部となっている。なおⅡ部とⅢ部については省略する。

図書目次

Ｉ

ロッテは何故猥褻か　9-25

「エルテルは何故死んだか」の一考察

和泉式部幻想　26[20]

一・貴船の祭　26-40

二・伏見の時雨　41-55

三・深草の雪　56-71

四・岩殿寺の夢　71-86

五・神の嫁　87-101

六・鳳来寺の怪　101-115

七・稲荷山の冬　116-130

標題については「イロニア」初出のものと，図書との間で大きな異同はない。ただし雑誌連載時には，六号からの各号に「和泉式部伝説」と連載名があったが，あとがきには，図書では「伝説」をはずした[21]との説明があった。

図書の目次中最初の「ロッテは何故猥褻か」だけはイロニア二号（1993.10）であり，他の和泉式部に関するものは，イロニア六号（1994.10）～十二号（1996.5）から採っていて，この間一年の開きがある。

巻頭「ロッテは何故猥褻か」と，その後の和泉式部幻想とのつなぎは，次の引用によって明確となる。川村は最初に保田與重郎の『エルテルは何故死んだか』をうけて，その後を続ける，p21

> もし理性と反省に富んだ婦人だつたら，「エルテル」のロッテは貞操であるさきに，肉体の愛の最後にまでふみ入らねばならなかつた。[22]

ロッテは一夫一婦制を無視し，姦通すれば立派だったというのである。一見して無体な，ないものねだりめいた言い方。しかしこの一句は，『エルテルは何故

死んだか』の巻頭にエピグラフとして掲げられた，貴船明神神託歌と照らし合う時，奥深いパースペクティヴのうちに改めて見えてくる。

貴船明神の歌は和泉式部の歌への返しである。

奥山にたぎりて落つる瀧す瀬の玉ちるばかりものな思ひそ

このような内容からみて，本図書は「ヱルテル」，「和泉式部」という二つのテーマを結びつけた，明確な「保田與重郎論」といえる。

3．4　影たちの棲む国（佐伯裕子）

北冬社1996年12月20日初版のもので，発売は王国社となっている。大きさは19.5cm×13.5cmで209頁。初出一覧はpp.208-209にあり，末尾に「(本書収録にあたり，各篇とも加筆削除を行いました。一著者)」とある。二十二編からなっており，各編内容の重複が多少ある。

全体で三章に分けてあるが，保田與重郎に関係の深い章はⅠ章の一部分と「Ⅱ　心をかきたてる“うた”」にある。最初に図書目次をあげ，次に同図書の「初出一覧」を記す。図書目次のうち「三島由紀夫の戦後の“女性像”」と「「辞世論」覚え書」には，保田與重郎への直接の言及はない。

図書目次

Ⅰ　“うた”のある記憶
～略～
青春の「やぽん・まるち」20-22
～略～

Ⅱ　心をかきたてる“うた”
保田與重郎の「日本女性語録」75-87
『万葉集』の恋歌 鏡王女の虚ろな恋 88-95
和泉式部私考　96-108
心をかきたてる“うた”　109-119

三島由紀夫の戦後の“女性像”120-126
「辞世論」覚え書　127-132

初出一覧より

青春の「やぽん・まるち」20-22
『保田與重郎全集・別巻四』月報，一九八九年七月

保田與重郎の「日本女性語録」75-87
「正論」一九九四年一二月号【初出題＝保田與重郎追想─「日本女性語録」に消えた王朝の雅】

『万葉集』の恋歌 鏡王女の虚ろな恋 88-95
「イロニア」一号・一九九三年七月【初出題＝万葉集の恋─鏡王女，恋の虚ろ】

和泉式部私考　96-108
「イロニア」六号・一九九四年一〇月【初出副題＝浮遊する表現者】

心をかきたてる“うた” 109-119
「短歌往来」一九九二年八月号【初出副題＝和泉式部を中心に】

著者佐伯は「関東軍の特務機関長だった，祖父土肥原賢二」p.67 とあるように，複雑な戦後を経験している。たとえば「中学の歴史の時間，友人と映画『戦争と人間』を観ている最中，あるいは大好きだった手塚治虫のマンガ『アドルフに告ぐ』を読んでいるとき……。そこに，謀略家で，極悪人の祖父がちらりと登場するのだ。」p.67。土肥原賢二は昭和二十三年「東京裁判でＡ級戦犯として処刑された。刑死のため，遺骨はない。」p.14。巣鴨である。

この事実によって，佐伯の同書全体の基調が定まってくる。

「祖父たちに処刑の判決のくだった夜，安堵して祝杯をあげていた入江侍従長を，わたしはいま[(23)]，淋しいと思う。」p.12。

その背景は昭和天皇崩御のあと，入江侍従長日記が新聞に掲載され，同「昭和二十三年十一月十二日（金）晴」の記載中，広田，土肥原ら七人の絞首刑判決をラジオで聞いた入江が「木戸さんが絞首刑にならなくて本当に結構だつた。今夜は，はしなくも祝宴のやうなことになつた。」p.9，を引く。

さて，このように内容にまで言及したのは，同書には八頁の小冊子付録があり，その付録の意味するところが，本テーマにおいては非常に重要だからである。そこには佐伯が何故保田與重郎を書き継いだのかが語られている。

次に，同付録を単一文献の例示として言及する。

付録は「佐伯裕子―影たちの棲む国　付録　桶谷秀昭＋佐伯裕子」と記されており対談である。小見出しには，「「東京裁判」と戦後の日本」，「保田與重郎の“精神”」，「『昭和精神史』について」，この三つがあげられている。

小冊子ではあるが対談内容は充実しており，単なる付録以上の価値があると考える。従来の目録作成仕様においては，このような小冊子の処置が放置されがちである。だがこの付録のような場合には，親書誌と子書誌の定義にとどまらず，内容に関わる評価分析まで対象としなければならない。dbDB : CR（目録規則）はこのような一見断片情報，断簡と見られるものに対してこそ有用性

を発揮する。

また「関連文献」という捉え方においては，全集月報の例を除いて，このような小冊子が連続してあるわけではなく，時折付録として出現するものである。記録や内容分析をする際に，「図書」というような定型文献に，連続した様態で接するのではないのだから，システムはあらゆる状況に柔軟に対処できるようにしておく必要がある。

そういった，内容と，形態の二方面からこの小冊子は，本システム（dbDB：S）の運用において典型的な文献として，ここに紹介した。

3．5　浪曼的滑走（桶谷秀昭）

新潮社1997年7月30日初版のもので，20cm×14cm，222pである。初出情報が巻末p.222にあり，以下に記す。

第一部　浪曼的滑走「新潮」一九九六年六月号（原題「浪曼的滑走――保田與重郎と北村透谷」）
第二部　保田與重郎論「イロニア」一～九号，十一，十二号（原題「回想と自覚」）

書名には，北村透谷という名前は副題にも上がっていないが，第一部はある程度詳細な北村透谷論と考えられる。初出第一部の名称は図書の書名ともなっているが，これは図書目次の「三　滑走」p.24，の内容に即したものであろう。「浪曼的滑走」の由来は，

「この拙論の題名の「浪曼的滑走［谷口注：滑走に傍点あり］といふのは，北村透谷が「我れ常に悩む」といふ自分でもよくわからない内面を抱きはじめた明治十八年から五十年間の歴史過程に生じた自覚の複雑なねぢれと，それの忘失がもたらした傾斜面との摩擦の様態にかかはるものである。それはなめらかな滑走ではありえない。」p.24-25

「やむを得ない，皮相上滑りの開化の斜面を涙を呑んで滑つて行くしかない。かういふ結論をにがい口調でいつて演壇を降りた漱石は，その翌年に明治の終焉に遭ひ，大正三年に『心』を書いた。」p.26

などの引用から推量できる。

初出の第二部であるが，イロニア初出の回数は十一回であり，図書での第二部目次項目数は九項目である。これはイロニア四号「肉声としての日本」が，イロニア五号「肉声としての日本（続）」と続き，同十一号「二つの万葉論（上)」，同十二号「二つの万葉論（下)」と，都合四初出を図書では二項目にまとめたことによる。

初出第二部に現れたイロニア連載名原題は「回想と自覚」であり，これは『萬葉集の精神』（保田與重郎）の章名と同じである。保田との距離は近い。図書で第二部を「保田與重郎論」とまとめたのは，内容として保田の『戴冠詩人の御一人者』（言霊の運命)，『現代畸人傳』（畸人について)，『芭蕉』（古典の論——芭蕉)，『萬葉集の精神』（二つの万葉論)，など保田與重郎の代表作をバランスよく配置している趣向からもうかがえる。

同図書を図書成立過程から見てみると，「新潮」と「イロニア」という二つの雑誌からの再録であり，際だって複雑ではないが，イロニア初出との照応に見られるごとく，1対1の対応関係はない。これはイロニアに関して言うなら「併合」といえる。なお加筆修正について著者の言及はない。

4　インターネット上での公開

これまでは，前述のような特定のテーマに関係する資料群やその考究は，論文や図書という，印刷物として公開するのが通常の姿であった。しかしテーマが限られていることもあり，媒体によっては人の目にもつきにくく，別の研究者がそれを閲覧したり，再利用したりするのは，時間や労力もかかり，はなはだ不便であった。しかし，このような特定のテーマに即した書誌データ記述の方法や意図は，他の専門家や関係者の目に触れ，相互に誤謬や錯誤をただすことによって，より正確に緻密に，そうして網羅的に成熟していくものである。

幸いにも，現代のネットワーク環境は世界中に広まり，多くの人がそれを新しい媒体として認知するようになってきた[(24)]。また，そのネットワーク上で情報を発信する環境も整ってきており，いくらかの技術の裏付けによって，比較的

簡便に「個人の電子図書館（PML)」のような形態で，人々に情報を開示することができるようになってきた。

もちろん現代のネットワーク環境は，動画などのマルチメディアを扱うにはまだ充分に成熟していない。精緻な画像や動画を世界中の人たちが，ごく普通の感覚で利用できるようになるには，しばらく時間がかかる。しかしテキストや簡単な画像程度ならば，娯楽だけではなく，研究の水準であってもインターネット上の情報を利用することは可能となった。

このたび，以前から考えてきた書誌記述の方式 dbDB：CR によっていくつかの資料を整理し始めたことにともない，これをインターネットに開示することとした。この第4章では，詳細な技術内容よりも（付録には概略を記した)，ネットワーク上で情報を公開することの全体的な技術概念を述べる。

4．1　全体概念と各機能

今回作成したシステムの全体を図2に，同図に関する説明を表1に示した。

4．2　WWW とデータベース

ここでは，dbDB：Sシステム全体の考え方を述べておく。

元来インターネット上での WWW サービスは，HTML 形式で書かれた文書や画像を一種の分散ハイパーテキストとして格納し，それをネットスケープなどの閲覧ソフトウェアで閲覧するのが通常の使い方であった。しかし，データ量の増加やそれに伴う複雑な情報検索の要求によって，単葉の HTML 文書を組み合わせただけの単純なデータ格納方式では，役に立たなくなってきた。

そこでとられ出した方法は，DBMS（データベース管理システム）によって，一定の方法でデータをコンピュータに格納し，検索は DBMS が持つ強力な手法を用い，出力結果の表示などの，利用者がインターネットに直接関わる部分を WWW サービスに任せる方式である。この DBMS 利用は歴史的に確立した技術である。

本実験の場合にも，これまでに存在した DBMS（FileMakerPro3）に，これ

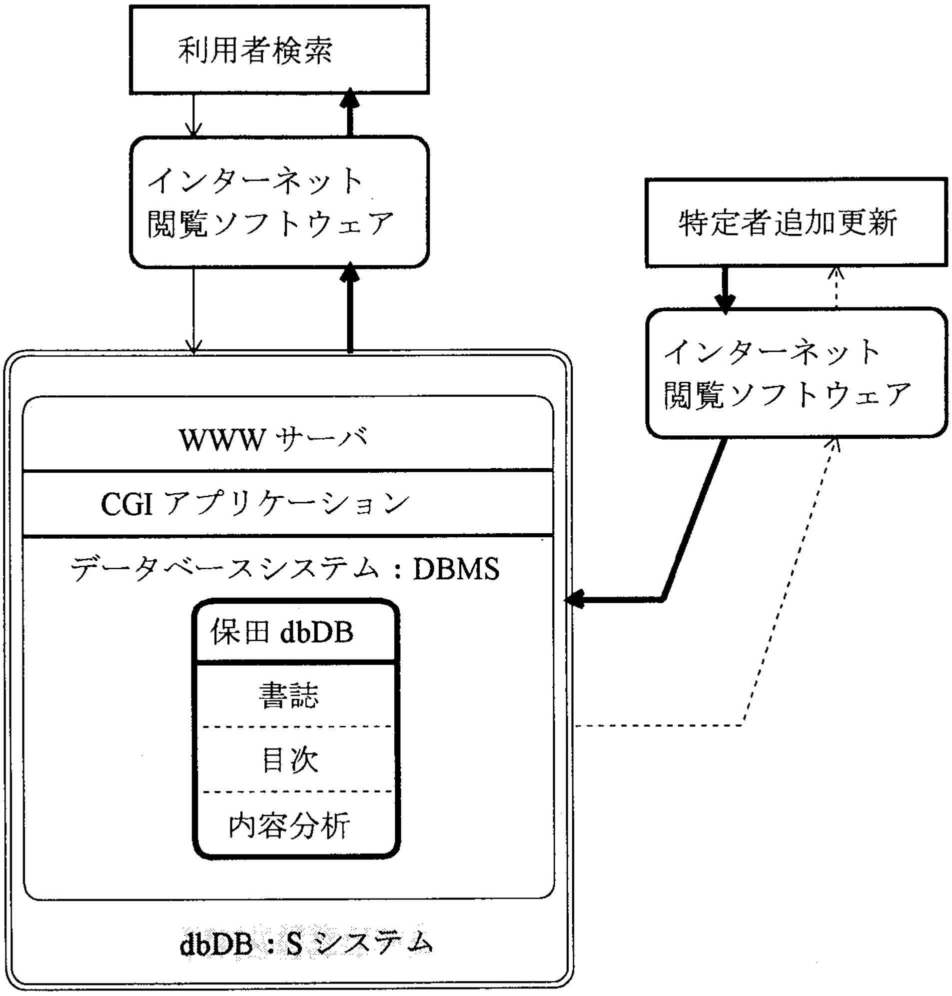

図 2　インターネット上の「保田與重郎 dbDB」全体図

までの方法で資料を整理格納した。すなわち蓄積することや，実際に高速検索することは，FileMakerPro3 にまかせ，これを利用者が直接対話する部分だけを一般的な閲覧ソフトウェアで扱えるようにしている。

このような手法を用いることにより，資料群の増加，それに伴う情報検索の速度や使い勝手に関して，将来的にも充分に実用になるシステムを構築できる。またインターネットの利用は検索だけではなく，データの更新や追加についても，関係者はそれぞれ距離的に分散した研究室や自宅から，時間を問わずにできるようになった。

4．3　利用者の利用

利用者には二種類あるものと想定してシステムを構築した。

表1　インターネット上の「保田與重郎 dbDB」解説

全体図の用語				解　説
(1) 利用者				作成者，研究者，不特定多数
(2)-1	利用者検索			dbDB 内容を閲覧だけする者。世界中のインターネット利用者が対象となる。
(2)-2	特定者追加更新			dbDB の内容を追加し編集する者。作成者を中心に，共同研究者，関係者や保守の補助者などをさす。地域や時間帯を問わずに共同作業が可能となる。
(2) インターネット閲覧ソフトウェア				WWW の仕様に従って作成されたソフトウェア。具体的には，ネットスケープとかインターネットエクスプローラなどをさし，公開資料を閲覧できる。
(3) dbDB：S システム				dbDB：CR 書誌記述仕様で作成されたデータベースをインターネット上で公開するためのシステム全体。
(3)-1	WWW サーバ			WWW 仕様の HTML 文書をインターネット上で公開する。WebSTAR など。
(3)-2	CGI アプリケーション			本例では，DBMS 内の情報を WWW 仕様に変換するソフトウェア。一例として，Tango for FileMaker など。
(3)-3	データベースシステム DBMS			大量複雑なデータをコンピュータで処理するソフトウェア。FileMakerPro3 など。
		保田與重郎 dbDB		保田與重郎関連の資料を dbDB：CR 仕様で記述し格納したデータベースそのものをさす。「表」形式で格納されている。
			書誌	書誌情報の格納表。
			目次	目次情報の格納表。
			内容分析	作成者などによって記された関連文献に関する内容評価分析情報の格納表。

一つは，この保田與重郎 dbDB をインターネット上で閲覧し，検索するだけの利用者であり，このクラスは世界中の不特定多数の人たちに自由に，いつでも，どこからでも，利用できるようになっている。データを自分自身のコンピュータに抽出し再利用することも可能である。

もう一つのクラスは，保田與重郎関係の資料群を収集し適切に入力し更新し，またそれを評価する人たちである。これについては，当初は筆者とその関係者，共同研究者に限定する予定であるが，各人が全システムを自由に操作できるような方法をとっている。

関連する表示画面を図３，４，５にあげた。

４．４　将来の姿

本稿での，インターネット上で稼働しているシステムは，現行の流通している技術をもとに開発したものであり，一般的なインターネット・リテラシー（基礎教養）によって利用できるものである。よって，将来のインターネットの技術動向にそって改善されていく余地も，また大きく残されている。

しかし，元来は特定テーマに関する研究者を対象としているものなので，そういった技術的なことよりも，共同研究の方法や，全文を格納していく際の著作権問題などの要因によって，将来のシステムの姿も大きく変化していく可能性がある。

また，今回はテーマを「保田與重郎」に限定し考究したが，対象が文献学的な範疇のものであるならば，データを精密に整理し格納すること，適切に検索すること，評価の記録を内蔵できることなどの諸機能を，他のテーマに応用することも非常に容易である。よって，特に近接分野での普及によっても新たな問題や視点が生まれ，将来の姿が改善される可能性を持つ。

まとめと展望

本稿では，

「１　新たな書誌データベース構築の意義」では，研究に直接関わる資料情

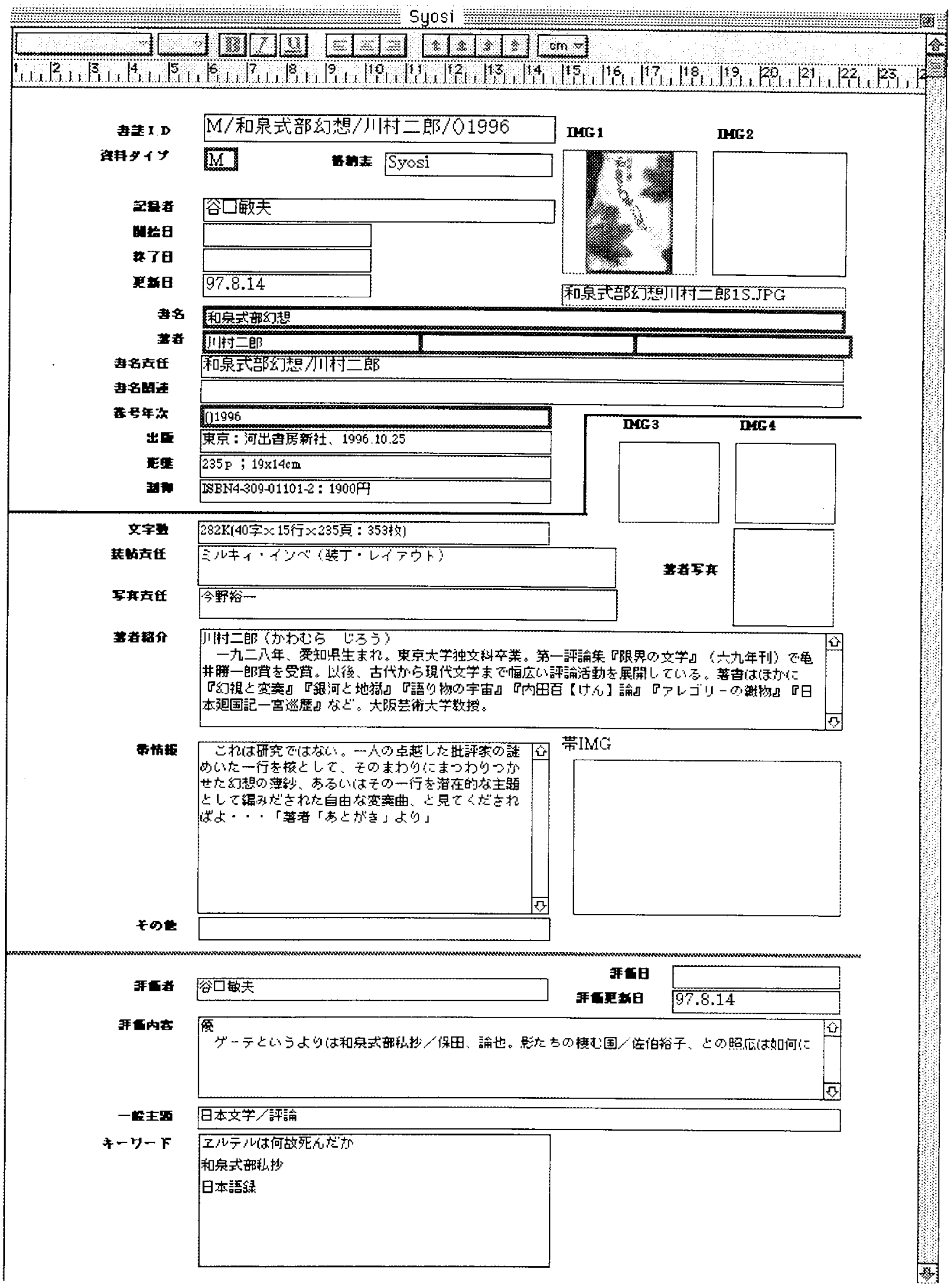

図 3　FileMakerPro3 での入力

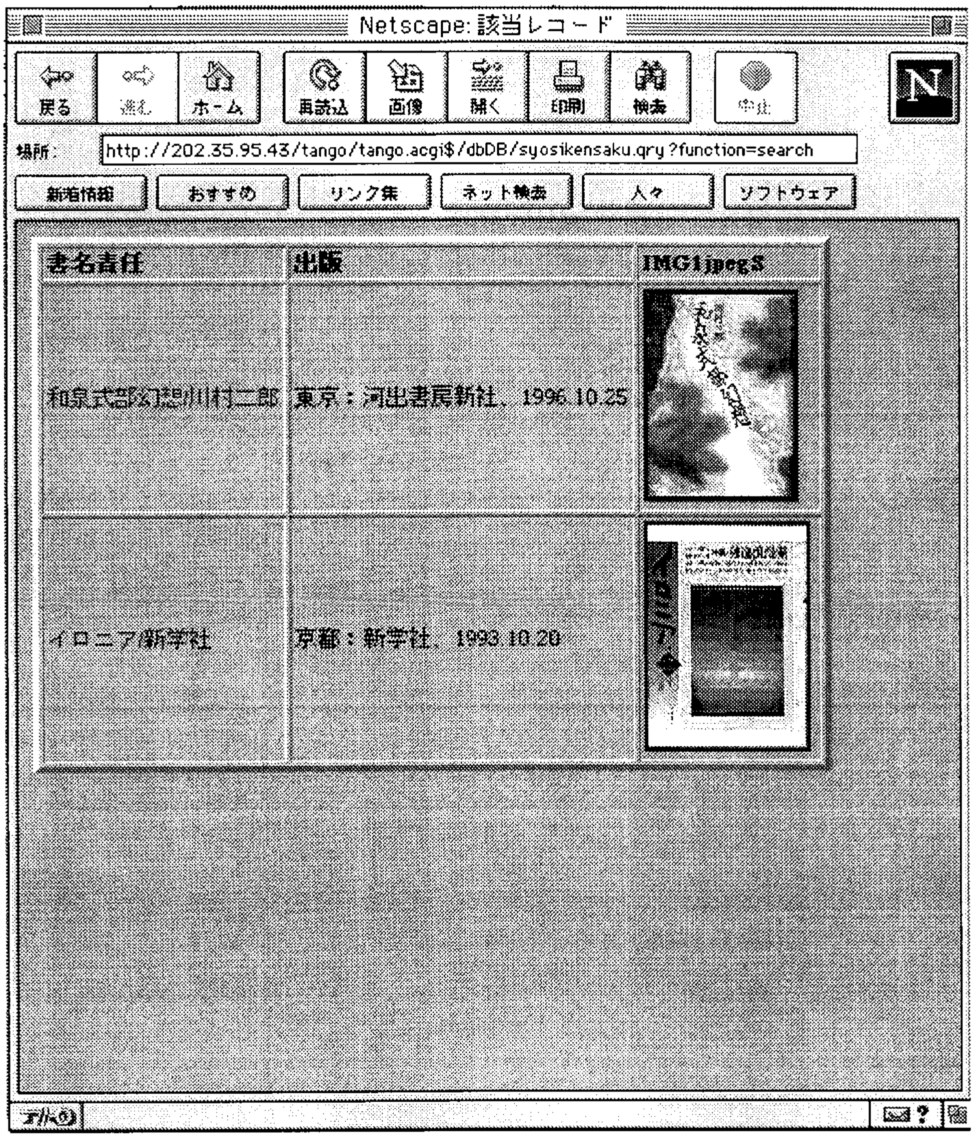

図4　インターネット上での一次検索結果

報をコンピュータで適切に整理格納する方法として，dbDB : S という方式を提案した。この方式によって，一般的な図書館目録よりも精度の高いデータベースを構築することが可能となった。また，文献を評価しその内容を資料群と関係付けて整理することができるので，研究者などが新たな執筆や考究をする際に，過去の考えや労力を再利用することが容易にできるようになった。

「2　dbDB : S の特徴」では，このシステムの具体的な姿やシステムの特徴を，dbDB : S 上での書誌構造や内容分析の面から述べた。また，これらの特徴を以下の五つの観点から詳述した。

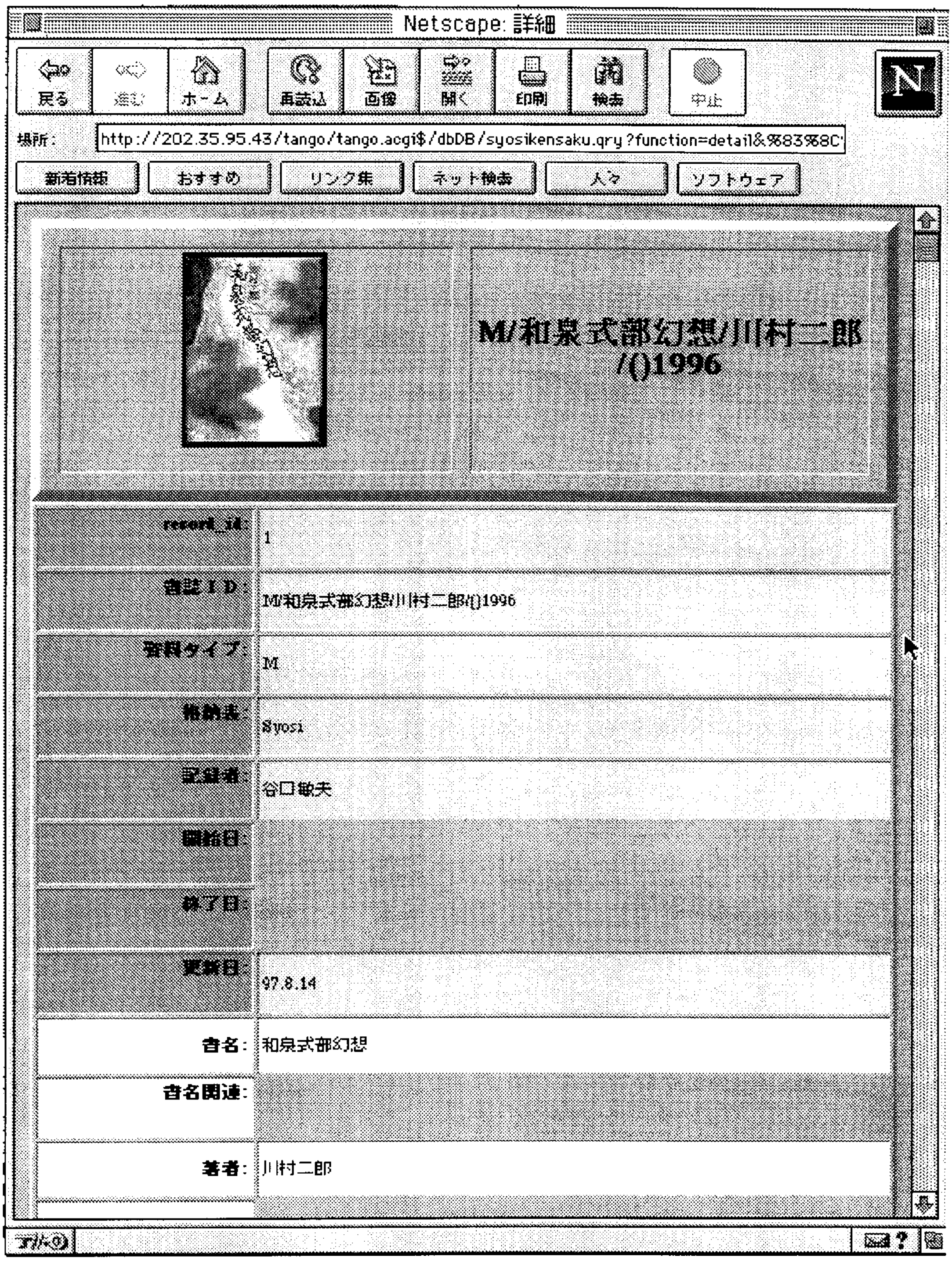

図5　インターネット上での二次検索結果

2．1　書誌類似情報
2．2　目次情報とその階層構造
2．3　初出と再録関係
2．4　内容分析情報
2．5　インターネット利用

「3　関連資料解題とその書誌構造」では，本稿で例とした特定テーマ「保田與重郎」関係の資料群を分析し，その特徴を述べた。テーマ内容自体に関しては，本稿の目的からみて省略した。関連資料群については，大きくわけて，図書，雑誌，単一文献の三つによって文献の構造を説明した。結論として，文芸評論での雑誌（イロニアなど）や，単一文献（小冊子など）の重要性を述べた。

「4　インターネット上での公開」では，こういった特定テーマの関連資料を，インターネット上で公開することの意義を考え，印刷物だけに頼るよりも，いくつかの点で優位な面を考察した。それは不特定多数の人たちが，場所や時間の制限をこえて利用できること。あるいは，より密接な共同研究の可能性についても述べた。また技術的には，こういったシステムが現代の世界的なインターネット技術の進歩にある程度依存することが可能であり，将来ともに保証された方法論であることについて述べた。

以上各章で論じた諸点からみて，今後のデータベース育成については，充分な可能性があることを結論とする。しかし，別の観点から，引用参照関係の整備，あるいは全文（フルテキスト）との関係については，考究しつくすことができなかったので，今後の大きな課題としたい。

註と参考文献

（1）　dbDB：谷口敏夫「ディジタル書誌データベース（dbDB）の考察：近代文学関連書誌を対象にした内容分析データベース」『本文研究　第二集』和泉書院，1997. 12（刊行予定）
本文中にもあるが，『本文研究』に出した段階では dbDB の仕様0. 5とした。その後実際のシステム（dbDB : S）を構築するに際して，本稿では dbDB : CR（目録規則）と dbDB : S（システム）とに区分した。

（2） 網羅性：ここでは網羅性を否定しているのではなく，全国書誌のような網羅的な総合書誌と，保田與重郎 dbDB のような専門書誌との対比である。

（3） 個人電子図書館（PML）：個人がマルチメディアを対象にして小さな電子図書館を作る考え方，およびその実際的なソフトウェア。「情報学における分類／小堀淳子」では「日本ワシタカ研究センター」を例にして PML のモデルが描かれている。

http://www.koka.ac.jp:8080/ss4/taniguti96M/0/30/KankeiRon/Kobori/Bunrui/bunrui.html

（4） 『定本三島由紀夫書誌』（島崎博，三島瑤子共編）：薔薇十字社，1972. 1. 25

（5） 『保田與重郎書誌』（神谷忠孝，奥出健共編）：笠間書院，昭和54年11月15日（1979年）

（6） 『保田與重郎全集解題』（谷崎昭男著）：講談社第一出版センター，平成元年十月四日（非売品）

（7） 帯情報：註「(9) 電子図書館 Ariadne」でも，長尾真の提唱により組み込まれている。

（8） 目次情報：目次情報の取り扱いについては以下の論がある。

長尾真他『研究情報ネットワーク論』勁草書房，(1994. 3)，9章「目次情報に基づく図書検索と OCR による目次入力の実用可能性」pp161-174（長尾真，谷口敏夫）

小門利男，谷口敏夫，長尾真「電子図書館における目次階層構造検索」1997. 3

http://www.koka.ac.jp:8080/ss4/taniguti96M/0/20/C96New/Kokado/KOKADO97.HTM

黒橋禎夫，萩原典尚，長尾真「目次情報を利用した図書検索システム」情報処理学会研究報告（情処研報）97 (40)，1997. 5. 15，pp27-32

（9） 電子図書館 Ariadne：1990年から始まった電子図書館研究会（座長：京都大学工学部長尾真教授）によって開発された実験システム。詳細は次の文献にある。

長尾　真他「電子図書館 Ariadne の開発(1)システム設計の方針」『情報管理』Vol. 38，No. 3，June，1995. 6，pp191-206

谷口敏夫他「電子図書館 Ariadne の開発(2)データの入力と編集」『情報管理』Vol. 38，No. 4，July，1995. 7，pp324-337

石川徹也他「電子図書館 Ariadneの 開発(3)検索支援機能」『情報管理』Vol. 38，No. 6，Sep. 1995. 9，pp538-548

原田　勝他「電子図書館 Ariadne の開発(4)読書支援機能」『情報管理』Vol. 38，No. 7，Oct. 1995. 10，pp611-618

澤田芳郎他「電子図書館 Ariadne の開発(5)電子図書館をめぐる諸問題」『情報管理』Vol. 38，No. 7，Oct. 1995. 10，pp619-626

(10) HTML タグ：HyperText Markup Language による定義。
(11) URL : Uniform Resource Locator。WWW サービスでの情報発信基地やその各 HTML 頁の住所。
(12) WebCAT：学術情報センターによる全国目録所蔵情報検索サービス。「NACSIS Webcat 総合目録データベース WWW 検索サービス」(試行サービス)
http://webcat.nacsis.ac.jp/
(13) 雑誌目次情報と全文：学術情報センターの試行サービスの一つ「学術雑誌目次速報データベース (SOKUHO : Current contents of academic serials in Japan)」では，鳥取大学医学部紀要の場合に，所蔵表示から直接論文の全文にアクセスすることができる。
http://www.sokuho.op.nacsis. ac.jp/ 学術雑誌目次速報データベース
http://www.sokuho.op.nacsis.ac.jp/articles/Y.html 同上「Yonago acta medica」
(14) 雑誌「日本浪曼派」の目次公開：谷口による公開。1997. 4
http://www.koka.ac.jp:8080/ss4/taniguti96M/0/40/Biblio/NRoman/NRomanHa.html
(15) 日本浪曼派の評価：従来一般的には芳しくない。様々な理由があるが，戦時下にあって美を説いたことが，戦後政治思想上の諸観点から批判の対象となっている。ナチズムやファシズムとの同視が安易にあり，今後それらを点検する必要があると考える。本稿主文では，文学論争は意図するところではない。しかし本注においては，対象とした主題に関して以下に若干の考えを述べるものとする。

保田與重郎や日本浪曼派がどんな風にとらえられているかを，比較的入手しやすい啓蒙書として「日本文学の歴史／ドナルド・キーン．中央公論社，全18巻，1997年」に見てみる。同書によれば，保田與重郎への言及は僅かであり，その作品内容への直接言及にいたっては絶無と言ってよい。

同書13巻では「モダニズムと外国の影響」堀辰雄の項（13巻 p184）で一度，「転向文学」亀井勝一郎の項で，「転向後も，亀井は文芸評論を書き続けた。判決のあった年，かつての左翼作家たちとともに，右旋回した保田与重郎を中心に日本浪曼派をつくった。」(13巻 p382)，と言うように「右旋回」という修飾付きであげられているにすぎない。

また17巻では項目「昭和初期の詩」のうち「『日本浪曼派』と日本的叙情性」では，小林秀雄への言及の後で「一方保田与重郎の影響力はきわめて短く，昭和二十年（一九四五年）の敗戦と共に終わった。三十五という若さにもかかわらず，保田の名は戦時中の超国家主義にあまりにも緊密に結びついていたため，終戦と共に文壇から去ることを余儀なくされ，その影響力も見る間に消えてい

ったのである。」（17巻 p348）と，極めて表層的で冷淡な評価がなされている。

また次の，保田與重郎を最後に取り上げた所では，完膚なきまでの否定評価をもって終わり，以後18巻での「批評」項目，すなわち「文芸批評家」という視点からは完全なる黙殺に置かれている。

「『コギト』と『日本浪曼派』の双方に特に関連のある詩人には神保光太郎（一九〇五～九〇年），田中克己（一九一一～九二年）や伊東静雄（一九〇六～五三年）がいる。これらの詩人（そしてこの二つの雑誌に投稿していた多くのあまり名の知られていない詩人たち）は，戦時中にほとんど狂信的とも言える口調で日本の正義を謳ったために終戦後は白眼視された。かれらを率いたのが保田与重郎だったが，その発言は詩人の叙情的な愛国宣言にとどまらず，他国を否定して日本の伝統を謳歌し，日本的でないものに対する憎悪をむきだしにしていた。」（17巻 p350）。

以上がキーンの保田與重郎に関する言及の全てである。

キーンの日本浪曼派や保田與重郎に対する評価は，戦後すぐの社会や文壇の考え方をそのまま引き継いだような所があり，通史として限界をあらわしている。細かく反論することはしないが，まずキーンが終始実際の作品を取り上げずに，保田與重郎を語るのは，文学史として正しい方法論であるとは言えない。次に，安東次男を典拠にして保田與重郎を「詩」の世界から論じるのは（17巻 p 348），一つの試みとしては評価できる。だが，保田を文学史の上で「詩」の範疇から論じるには，家持，後鳥羽院，芭蕉などと引き合わせておこなわなければ，意味をなさない。言葉の正確な意味で，近代日本文学史上保田與重郎を一般的な「詩人」の添付対象として扱うのは，粗雑である。最後に，保田與重郎や日本浪曼派に対して，古典論や，ナショナリズムや反近代の思想という観点から，一点の言及もないという事実は，はなはだしいとりこぼしである。

以上が，私のキーンに対する感想であるが，しかしキーンの感覚が比較的に，日本近代・現代文学史の中で一般的なものであることは，いなめない。我が国の戦中戦後の文学史を，世評や見えるものだけを対象にし，真摯に掘り下げるという行為なく，かくのごとく「一刀両断に裁断する」という事実に即し，同主題研究者として深く慨嘆する。

(16)　雑誌イロニアの終刊予定：「当初の予定通り，次号十二号をもって小誌は終刊する。休刊でもなければ廃刊でもない。」（十一号編集後記）による。

(17)　雑誌イロニアの特集内容：以下にこの雑誌の性格を示すものとして「イロニア」全号の特集内容を記した。表紙から特集名，解説文，号年次を転記し，ISBN は裏表紙から採った。

1　わが万葉集：日本の詩歌の礎であり，文化の精華である一大アンソロジー

を現代はどう読んだらいいのか。古典としての万葉集を「自分のうた」として読んできた人たちの声を聴く。vol. 1. 7-1993, 111p, ISBN4-7868-0001-5

2　独逸浪漫派：ロマン主義的な芸術や志向は定義しがたい精神の営為であり，生成変転しつつ価値を翻弄してやまない。そこから現代は何を学べばよいのか。第二号 10-1993, 111p, ISBN4-7868-0002-3

3　河合寛次郎と棟方志功：陶芸家であって陶芸を超え，版画家でありながら版画を超えて相寄った二人の芸術者の心。民芸というフィルターをはずし，名付けえぬその魂の振幅に創造の源を思う。第三号 1-1994, 111p, ISBN4-7868-0003-1

4　佐藤春夫：“才能の氾濫”とまでいわれるほどに，あらゆる文芸のジャンルに手を染め，若い文学者達を招き寄せた“東洋の文人”は何処へいってしまったのか。没後30年を迎えたいま，伝説の文学に思いを馳せる。第四号 4-1994, 111p, ISBN4-7868-0004-X

5　明治の精神：平成が始まって以来，時代の行方はさらに不透明感を深くしている。内と外とのせめぎ合いの中で，みづからの相貌を明らかにする必要に迫られた明治人のメンタリティを追慕し，世界人としての日本人を考える。第五号 7-1994, 111p, ISBN4-7868-0005-8

6　和泉式部：「うた」を通じて愛の感覚を生きた王朝女流歌人のなかでも，ひときわ奔放な話題を提供する一方で，説話や伝説に取り込まれ，謎めいた陰影を留めてきた女性。その重層的な魅力に様々な角度から光をあてる。第六号 10-1994, 103p, ISBN4-7868-0006-6

7　伊東静雄：「わがひとに與ふる哀歌」「夏花」「春のいそぎ」「反響」——4冊の詩集とわずかな散文を遺して46歳で逝った詩人の言葉と精神は，きのうの思い出になりきれないままに現代をさまよい，折りにふれて私たちの裡にしのびこむ。第七号 1-1995, 103p, ISBN4-7868-0007-4

8　折口信夫：国文学者，民俗学者，歌人として，古代と現代を自在に往還しつつ，日本の詩と清らかな日本人の姿を求めつづけた希有の人——文学的な刺激と学問的な示唆に富む折口信夫の発想をさまざまな角度から考える。第八号 5-1995, 107p, ISBN4-7868-0008-2

9　京あない，奈良てびき：平凡ということは，長い歳月と何代もの人生にわたる洗練の結果である——古代から現代まで人々がくらしの核に美を守ってきた，ふたつの古都への心の旅路。第九号 7-1995, 115p, ISBN4-7868-0009-0

10　三島由紀夫：我々がその衝撃的な死に立ち会わされてから25年の歳月が流れた。虚と無に辿り着いた観念を内包したままに滅んだ肉体は，むしろあの

時を境にもう一つのいのちを生きはじめたのかも知れない。第十号 10-1995, 115p, ISBN4-7868-0010-4

11　現代畸人伝：畸人とはどんな人間のことだろうか。畸人に託した思いを述べた文章，即ち畸人伝は著者のもっとも深い人間観を示し，またそれは文学観の根底にふれる哀惜の情と志の披瀝に違いない。第十一号 1-1996, 111p, ISBN4-7868-0011-2

12　芭蕉：日本の文芸を考えて，最後に指を屈する詩人としての芭蕉は今日も新しい。指標を失った時代に，詩人の生理とモティーフが遺した表現から，我々はどんなメッセージを受け取ることができるのだろう。第十二号 4-1996, 135p, ISBN4-7868-0012-0

(18)　現代畸人伝：伝となっているが，保田の同名図書は「現代畸人傳」である。

(19)　解体と超越についての試論：文学界（49巻4号）の目次上では266頁から始まっているが，これは誤植である。実際には246頁からである。

(20)　貴船の祭：イロニア六号では「貴船の祭り」と，送りがなが付く。

(21)　伝説と幻想：図書では「伝説」をはずし，書名末尾を「幻想」とした。「ここに収めるに際して「伝説」の二字を表題からはずしたのは，伝説の研究，考証と受け取られるのではないか，という気がかりがふときざしたからである。これは研究ではない。」p234（あとがき）

(22)　ヱルテル：保田與重郎『ヱルテルは何故死んだか』からの川村による引用。詳細に記すと，保田の同書中「ロッテの辯明」p11（昭和十四年四月二日，ぐろりあ・そさえて版）にこの引用内容があり，各研究者の参照が多い「多情は貞節のイロニー」も同頁である。

(23)　わたしはいま：前後内容から見て，昭和五十七年東條元首相夫人勝子が亡くなられたあと，東條邸が取り壊された，いま。なお佐伯の東條邸残骸描写には鬼気せまるものがある。「東條邸がとり壊された日，わらわらとその家が土埃りをたてて崩れたなかに，夫人の部屋の畳が黄色く腐っているように見えた。」p12（丘の上の家）

(24)　中村一夫「インターネット上の源氏物語：データベースに関する覚書」日本語研究センター報告（大阪樟蔭女子大学）4, pp15-27, 1997.3

付　録

(1)　保田與重郎関連資料

1．日本浪曼派　復刻版「日本浪曼派」全四冊／中谷孝雄編集代表，雄松堂書店，昭和四十六年十二月十五日.

2．昭和精神史／桶谷秀昭　文藝春秋　（1992.6.25）

3．イロニア　新学社　1号（1993.7）—12号（1996.4）
4．文学のプログラム／山城むつみ　太田出版　（1995.4）
5．保田與重郎と昭和の御代／福田和也　文藝春秋　（1996.6）
6．和泉式部幻想／川村二郎　河出書房新社　（1996.10）
7．影たちの棲む国／佐伯裕子　北冬社　（1996.12）
8．影たちの棲む国付録対談
「佐伯裕子：影たちの棲む国／桶谷秀昭，佐伯裕子」（1996.12）
9．浪曼的滑走／桶谷秀昭　新潮社　（1997.7）

(2) dbDB : S で使った機器システム

開発機器

PowerMAC 8600/200 224Mb 内部メモリー，5GbHD。アップル社

ソフトウェア

基本OS：MacOS 7.5，アップル社
DBMS：ファイルメーカープロ　Ver 3（FileMakerPro3），クラリス社
CGI 構築：Tango for ファイルメーカー V1.6J，内田洋行
HTTP サーバー：WebSTAR V2.2J，販売（株）SRA

(3) データベース格納形式

1．書誌表

dbDB : CR 上での定義	FileMakerPro3 上での定義／同タイプ	
0.0　書誌ＩＤ	書誌ID	計算
	資料タイプ	テキスト
0.1　格納表	格納表	テキスト
0.2　記録者	記録者	テキスト
0.3　開始日	開始日	日付
0.4　終了日	終了日	日付
0.5　更新日	更新日	日付
	書名	テキスト
1.1　書名責任	書名責任	計算
1.2　書名関連	書名関連	テキスト
	著者	テキスト（繰り返し）
	著者関連	テキスト
1.3　巻号年次	巻号年次	テキスト
1.4　出版	出版	テキスト

1.5　形態	形態	テキスト
1.6　制御	制御	テキスト
2.1　文字数	文字数	テキスト
2.2　装丁	装幀責任	テキスト
2.3　表紙イメージ	IMG1	オブジェクト
	IMG1jpegS	テキスト
	IMG2	オブジェクト
	IMG2jpegS	テキスト
	IMG3	オブジェクト
	IMG3jpegS	テキスト
	IMG4	オブジェクト
	IMG4jpegS	テキスト
2.4　写真	写真責任	テキスト
2.5　著者紹介	著者紹介	テキスト
	著者写真	オブジェクト
2.6　帯情報	帯情報	テキスト
	帯 IMG	オブジェクト
2.7　その他	その他	テキスト
3.1　評価者	評価者	テキスト
3.2　評価日	評価日	日付
3.3　評価更新日	評価更新日	日付
3.4　評価内容	評価内容	テキスト
3.5　一般主題	一般主題	テキスト
3.6　キーワード	キーワード	テキスト（繰り返し）
	関係 URL	テキスト

2. 目次表

dbDB：CR 上での定義	FileMakerPro3 上での定義／同タイプ	
4.0　書誌 ID	書誌 ID	テキスト
4.1　格納表	格納表	テキスト
	タイトル	テキスト
	著者達	テキスト（繰り返し）
4.2　階層	階層タイトル著者	テキスト
4.3　タイトル／著者	順序	数字

		頁始	数字
		頁終	数字
		冒頭	テキスト
4.4	初出情報	初出誌名	テキスト
		初出巻号	テキスト
		初出刊年	数字
4.5	初出情報源書誌 ID リンク	初出情報源書誌 ID リンク	テキスト
4.6	分析 ID	分析 ID	計算
		初出注記	テキスト
		関係 URL	テキスト

3. 内容分析表

dbDB : CR 上での定義		FileMakerPro3 上での定義／同タイプ	
5.0	書誌ＩＤ	書誌 ID	テキスト
5.1	分析ＩＤ	分析 ID	テキスト
		分析番号	計算
		分析順序	数字
5.2	格納表	格納表	テキスト
5.3	分析者	分析者	テキスト
5.4	分析日	分析日	日付
5.5	分析更新日	分析更新日	日付
5.6	分析観点	分析観点	テキスト
5.7	分析頁	分析開始頁	数字
		分析終了頁	数字
5.8	分析引用文	分析引用文	テキスト
5.9	分析評価	分析評価	テキスト
		関係 URL	テキスト

(4) データベース化とサーバー開設に関する技術メモ

本稿で使用した DBMS はマッキントッシュ用の FileMakerPro3 である。比較的使用法が簡便明快なのでこれを選んだ。一応基本的に関係データベース仕様なので，ある程度複雑な表関係を定義することも可能であった。参考になる雑誌記事としては，「ファイルメーカーで簡便 Web 発信／渡辺玲」（日経 Mac，97.7〜97.10月号）が役に立った。

また DBMS と WWW サーバーとの中継ぎは，現状では Tango for FileMaker を

CGI 処理用に使っている。仕様が V1.6 のために，表紙イメージの処理は HTML 記述を直接埋め込むなど，ある程度の工夫を要求された。V2 以上になると PICT イメージをファイルメーカに蓄積したまま，自動的に jpeg 変換をして利用者に転送できるようになった。

なおこういったデータベース管理システムで，私が現在求めているものは，表関係の維持と検索エンジンだけである。UNIX マシンや WindowsNT マシンではさらに高度な DBMS がよく使われているが，それらは今後の課題としたい。いずれにしても，フルテキストを対象とした特殊な高次検索の実験には，多くのアプリケーションソフトを自製し，DBMS 付属の検索エンジンに上乗せするなどの工夫が必要となる。

他には，Windows95 上ではボーランド社の IntraBuilder を使って，同じようなシステムを実験しているが，ファイアーウオールの存在により，外部からアクセスするには種々の不都合がでている。こういった問題は技術的と言うよりも運用上の問題であり，現在は放念している。将来は，専用でインターネットを利用するような試みもし，様々な障害をクリアすることも考えている。

WWW サーバーについては，マッキントッシュ用の WebSTAR を利用している。すでに 1 年以上使っているが，不都合はない。

サイトの構築には多数の機器類，ソフトウェアを利用しているが，これらは「イントラネットでの記録管理／谷口敏夫」（レコード・マネジメント：記録管理学会誌，33号，pp15-22，1997.4）に記したので，参照されたい。

(5) 関係 URL リスト

本稿で特に関係の深い URL を記す。

http://www.koka.ac.jp:8080/ss4/taniguti97M2/

http://www.koka.ac.jp:8080/ss4/taniguti96M/

上記アドレスは，変更される可能性もあるが，主サーバー（/taniguti96M/）を中心にして，継続的なアクセスを可能とすることに留意する。